



第 50 号
工芸・愛海詩の会
会 報

平成22年10月 5 日発行

編集発行人／工芸ギャラリー
佐藤 睦子

〒064-0821
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
TEL・FAX／(011)613-1112
WEBSITE
<http://www.emishi-s.com>
E-mail:kougei@emishi-s.com



(伊賀組紐・三代目、廣澤徳三郎)



(織物美術家・龍村光峯)

十三年目の秋

暑い夏がやっと秋を連れて来た。芒の穂が銀色に光り、風にゆれ、夏の名残とクロスし、秋は深まる。

これから絵画や工芸、書などの美しい作品を鑑賞するには良い季節になる。ゆったりと感動することは頭に知を、心に慈を、体に歓を与える。その作品が醸し出す気品がさざ波のように伝わってきたら心の窓が開かれ、頭と心と体は豊かに高められる。その良き波動を身近な人にも送る。自身が取り巻く人や物が確かな豊かな山脈のようにつながればこんな楽しいことはない。

ギャラリー愛海詩にいらっしゃるお客様が「ここに来るとなんだかホッと帰りたい。それは素晴らしい手作りの作品が持つ気品、エネルギー、魂、さざなみのようなものがそのようにさせるのだらうと、私は密かに思っている。そして私自身もこのギャラリーにすることが楽しく、うれしいのだ。」

工芸ギャラリー愛海詩も今年の秋、十三年目を迎える。お支えいただいている会員諸氏、愛海詩に心を寄せて下さっている方々に深く感謝申し上げます。みなさんの思いと作り手の思い、そして私の思いが響き合い、山脈のように連なり、作り手が良い作品を創作できますよう、そしてみなさんの生活に潤いを送れますよう、そのように願い、語り、働くことを初心に返って務めようと思う。そして、皆さんへの感謝の思いもこめ、この秋素晴らしい作品展を二つ送りたい。

(佐藤 睦子)

織物美術家（京都）

龍村 光 峯

— 錦 — 光を織る

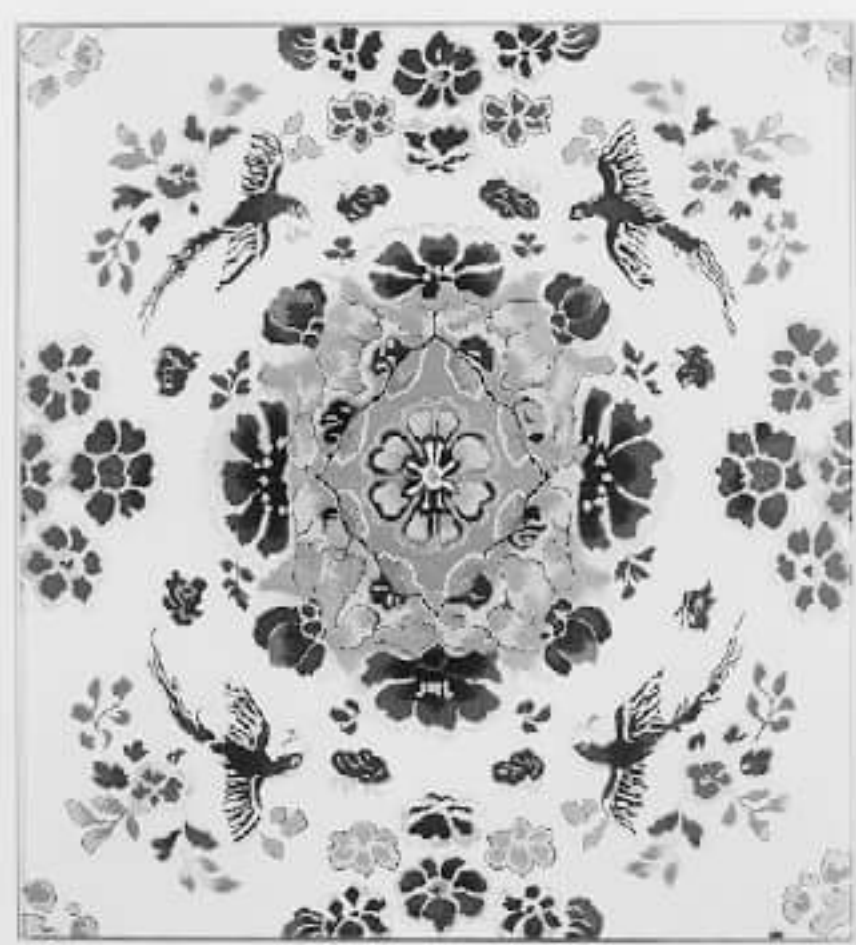
10月12日～10月23日

龍村光峯プロデュースの作品展、帯、額、バック類、テーブルセンターなど約40点を展示する。昨年に続き2回目、この宝石のような織物に接するのは至福の時を過ごすことだ。海外の専門家からも「世界で最も美しい織物」といわれる錦織は光線の働き、見る角度により、その光を紡ぐように、幾重にも表情が変わる。光峯の精緻ですばらしい仕事ぶりは、正に「光を織る」というのに相応しい。その作品群はまるで宝石を飾り、身につけるような作品である。「織りの宝石」といっても過言ではない。



龍村 光峯

今年三月、龍村光峯の工房を訪れ、その人柄に触れ、作品との一致を見た。時に命を削るような仕事ぶりである。一流の作り手をもつ、独特の気品がある。それは初代龍村平蔵氏から受け継ぐ正当な血脈であり、祈りと生かされていることを知る人の清々しさである。また、技の伝承への腐心には頭が下がる。光峯は世界を念頭に日本の宝である錦を創造し、大義と大事を成す。この好期、多くの方に光峯と、その作品に出合っていたきたい。



錦織額「和の集」120×113 (cm)
上下、左右のシンメトリックな構図はシルクロードの文化交流、平和への願い、人類の叡知を歌うかのような。包み込むような優しい白を背に青、緑、金の微妙な色目が美しく響きあう。

● 代 表 作 ●

- 佐賀市文化会館、緞帳「多布施川の光と風」
- 大蔵省（現財務省）買い上げ、三田会議所納入、タペストリー「和の集」
- 伊勢神宮式年遷宮記念「有職五十鈴川間道」
- 皇太子妃殿下ご婚礼支度品「雅の松」
- 東宮御所納入、タペストリー「瀬戸のうちうみ」
- 財団法人新日鐵文化財団紀尾井ホール、屏風「天平の風韻」
- 東京都新宿区四谷区民センター、緞帳「TAMAGAWAきらめき」
- 秩父小野田株式会社山手倶楽部、タペストリー「フェニックス」「五行一木火土金水」
- 国際交流基金関西国際センター、タペストリー「かわらけ宝鏡文」
- 九州大学医学部創立百年記念百年講堂、緞帳「彩綴海松頭微の図」
- 国立京都迎賓館貴賓室、会議室「水明の間」の襖裂製作および刺繍等監修
- 国立京都迎賓館主賓室、タペストリー「暈縹段文（一對）」
- 源氏物語千年紀 記念制作「紫の追憶」



錦織「扇バック」虹暈ゴールド
巾30×高さ17.5×奥行7.5 (cm)
品格のある金色が知的で教養ある女性をいっそう際立たせる。表面の襷は一流の職人のみが成し得る技でその陰陽が物語を作る。

● プロフィール ●

- 1946年 龍村順（号光峯）、兵庫県宝塚市に二代龍村平蔵の三男として生まれる
- 1971年 早稲田大学文学部人文学科を卒業
国際交流基金事業部展示課に勤務
- 1976年 父二代龍村平蔵の後継者として、家業を継ぐべく京都に帰る
「株式会社龍村平蔵織物美術研究所」を設立。龍村光峯、代表取締役役に就任
- 1982年 社名を「株式会社龍村光峯」に改称
- 1994年 日本伝統織物保存研究会を設立。
龍村光峯、理事長に就任
- 2000年 財団法人日本文化藝術財団より、日本伝統文化振興賞を受賞
フィンランド・ラハティ市立美術館にて個展を開催
京都文化博物館にて帰朝展を開催
- 2003年 ポーランド・クラカウ市国立博物館所属日本美術センターにて作品展を開催
ハンガリー・ブタペスト市国立応用美術館にて作品展を開催、講演を行う
- 2004年 イタリア・ローマ日本文化会館にて作品展を開催
フランス・パリ日本文化会館にて作品展を開催、講演を行う
- 2005年 国際日本文化研究センター主催、国際シンポジウム「日本の伝統工芸再考・外から見た工芸の将来とその可能性」に参加
- 2009年 九州国立博物館ミュージアムホールにて「光の織物—光峯の織物美術」展開催

ご挨拶／作品展によせて

二〇〇三年から二〇〇四年にかけて、ヨーロッパ四か国の会場で「光峯の織物美術—錦の美」展が開催された。ポーランドのクラカウ市にある国立博物館日本美術研究センターを皮切りに、ハンガリーはブタペスト市の国立応用美術館、イタリアはローマ日本文化会館、フランスはパリ日本文化会館と巡る、世界美術工芸史上初めて「錦織の織物美術」を「美術展」として開催する試みだった。私の錦織の織物美術が世界的にも類例のないものであることは、染織美術界の長老だった故北村哲郎氏から聞かされていたが、このヨーロッパ巡回展での来場者の反応から、それが事実である事を改めて確認した。来場者に書いてもらった感想文は、こちらが気恥ずかしくなるくらい驚きと絶賛の声に満ちていた。私自身はフランスの織物生産の中心地であるリヨンには錦織の織物美術が存在するだろうと思っていたのだが、フランスの織物製作者からも、「こんなに多彩で精緻な織物は見たことがない」と驚きの声が上がった。また日本では法隆寺や正倉院の古代錦の芸術的な素晴らしさがある。これらの歴史上の名作が、今日のようない「美術品」あるいは「芸術」として明確に認識され評価されたことはなかったのではないかと。もっとも、「美術」や「工芸」という概念そのものが西洋近代の発明品なのだから、それは当然といえば当然のことなのかもしれない。アジア・アフリカなどの非西欧世界では、もともと美術と工芸の区別などなかったのである。城や寺などの障壁面に代表されるように、今日「美術品」として扱われているものも、もともとは美術品としてつくられたわけではない。江戸時代までのわが国では、「生活文化の中の芸術」として生活を飾り、暮らしを豊かにするためのものだった。西洋の人々に「生活が芸術化している」と驚嘆された所以である。現代人が考える「美術品」と「工芸品」の違いは、近代の概念的区別に基づく一種の幻想ではないかと私は考えている。基準にとらわれることなく、素直に心から感動して「これは芸術だ」と感じたならば、その印象のほうが正しいのではないのだろうか。「錦—光を織る」作品展、ぜひご覧下さい。（織物美術家・龍村 光峯）

伊賀組紐

三代目 廣澤徳三郎 組紐展

受け継ぐ伝統の技

11月2日~11月14日

伊賀組紐の中興の祖といわれる初代を祖父に持ち、3代目廣澤徳三郎は伊賀組紐の重鎮である。ギャラリー愛海詩、そして北海道で初めての作品展である。帯締め、ネクタイ、ベルト、ストール小物など約40点を展示する。手組み、高台のもつ風合い、本物の組紐がもつ優美な品格をご高覧下さい。



廣澤家玄関、老舗の風格がある

Ⅱ 伊賀組紐の歴史Ⅱ

我が国の組紐の歴史は、古く大陸文化が渡米したときに伝わるものといわれています。初めは主に経巻・華籠(けご)などの仏具、神具、武士の甲冑や刀の紐などに用いられ、その技術は時代とともに伝承され、主に武具として大小名の庇護を享けて江戸にのみ残っていました。その後、明治維新の廃刀令によって今までの武具から帯締めとしての用途に需要が拡大されました。その技術を明治三十五年、廣澤徳三郎が習得し、伊賀の地に持ち帰り開業したのが伊賀組紐の始まりです。初代徳三郎が蒔いた一粒の種が、伊賀の人々の手によって脈々と受け継がれ、昭和五十一年には国の定める伝統的工芸品に指定され、地場産業として発展し、今日に至っています。

三代、廣澤徳三郎は伊賀組紐の真髓を体の芯にたたみこんでいる。新作のアイディアは尽きない。自分が苦心したデザインを多くの人が身につけてくれることが一番の組み手としての幸せだという。手組みの伊賀組紐は締めあじが良く、気持ちいいくらいピシッと決まる。風土が培った技、私も手組み伊賀組紐の大ファンだ。



帯締め 長さ155cm、高台、高麗組み
二枚もので表情が違う両面を楽しめる。
上は淡い紫と緑、金色のグラデーションが品よくまとめられている。下は総亀甲柄で、技のすばらしさが際立つ。



組紐ネクタイ

絹100% ケンロウ染
織りでは出せない、
模様の流れ、独特なしめ安さがある。おしゃれに決めたい。

組紐ストール 長さ127cm、絹100%
組紐財布

使うごとに肌や手になじんできて、
手組みの風合いを楽しめる。
色合いも美しい。

● プロフィール ●

昭和21年 元祖伊賀組紐2代目徳三郎の長男として生まれる。
昭和53年 第2回全国伝統工芸品展協会会長賞受賞
昭和54年 勲6等瑞宝章受賞
昭和55年 第4回全国伝統工芸品展協会奨励賞受賞
平成3年 伝統工芸士認定(通産大臣指定)
平成5年 中部通商産業局 局長表彰
平成6年 勲7等宝冠章受章
平成12年 第1回伊賀組紐展市長賞受賞
平成13年 三重県産業功労賞 知事表彰
平成14年 第2回伊賀組紐展(財)伝統的工芸品産業振興協会会長賞受賞
平成15年 第3回伊賀組紐展市長賞受賞
平成19年 経済産業大臣表彰

皇后陛下美智子妃殿下下台覧〈昭和42年〉
皇后陛下ご高覧の際帯締め高麗十六菊模様を献上
皇太子殿下、美智子妃殿下下台覧〈昭和48年〉
皇太子妃殿下雅子さま御料品として納入御買い上げ〈平成11年〉
秋篠宮妃殿下紀子さま御料品として納入御買い上げ〈平成11年〉

ご挨拶／作品展に寄せて

愛海詩の会の皆様、初めてご挨拶を申し上げます。工芸ギャラリー愛海詩・佐藤様から作品展のご依頼を頂き大変嬉しく存じております。私共業界は、他の工芸品のように個展をしながら販売をするという環境ではなく、主に問屋・小売店等から消費者の方々に流れる仕組みになっていて、今回の作品展のような形は今までには少なく、皆様方のご期待に添えられるか不安であります。当工房で製作いたしました伊賀組紐の数々な作品を取り揃え展示致します。磨きぬかれた伝承の心と技が生み出した優美な糸の芸術・格調高い伝統の香りが伝わる徳三郎の組紐をお楽しみいただければ幸いです。

此処で、当工房と、伊賀組紐についてご紹介をさせていただきます。

組紐は長い伝統を持つ日本の優れた工芸品の一つです。奈良時代以後に日本で作り始められた組紐は、経巻・巻物・甲冑や刀の紐などに使用され、その後、明治維新の廃刀令により武具から帯締めに姿を変え用いられるようになりました。江戸に残っていた組紐の技術・技法を明治三十五年、初代廣澤徳三郎が習得し、伊賀の地に持ち帰り開業したのが伊賀組紐の始まりです。昭和五十一年には国の伝統的工芸品に指定され、脈々とその技術が受け継がれ現在に至っております。私もその後継者の一人で、平成三年には、伝統工芸士に認定され、平成十二年に三代目廣澤徳三郎を襲名いたし、現在まで四十五年間組紐一筋に打ち込んでまいりました。

さて、今回展示させていただく作品は、伝統的な伊賀組紐の代表作であります。帯締めを中心に準備させていただきました。他の作品の中では、特にお披露目をさせていただきますのが、紳士ものとして製作いたしました「手組みネクタイ」と「手組みベルト」です。

この作品については、あまり市場には出回っていない物ですからきつとお喜びいただけるのではないかと思います。あとは、小物・組紐グッズとして、魔除け携帯ストラップ・正絹マフラー・財布など色鮮やかに取り揃えてご覧いただけるよう準備致しております。是非お越しいただきご覧下さい。

(伝統工芸士・三代目 廣澤徳三郎)

逸子探訪

(第4回) 永平寺の気韻

昨年、秋も深まりゆく頃、長く心に思っていた永平寺を訪れる機会に恵まれた。一日参籠することができ、わずかな時間であったがほんの少し、禅の世界を体験できた。あのいい知れぬ感動の日から一年が経とうとしている。今の私にあの言葉を失い、打ち震えるような美しさを筆舌に尽くすことができるのか、語ることによりその言葉の隙間からポロポロ真実がこぼれ落ちて行くような気もして難しくも思うが、なんとか筆を進めて行くことにする。

私が永平寺行きに思いを重ねたのは七年前、NHKの「永平寺一〇四歳の禅師」、当時の禅師である宮崎奕保禅師（一〇八歳で示寂）の日常をとらえた番組への感動が心の奥にあったこと、三年前最愛の父が他界したこと、そして浄國寺ご住職、高橋浄英様とその奥様である美江子様との出会いがあった。



〈仏殿〉本尊である釈迦牟尼仏を奉安。七堂伽藍の中心部に位置し、方三間裳階付き、総檼造で、中国宋代の形式の石畳敷である。国家安寧、万民富榮を祈念する場所。

永平寺は一二四六年、道元禅師が開いた曹洞宗の大本山として二百人あまりの僧侶・雲水が坐禅を中心に据え、日夜修業に励む根本道場である。深山幽谷、山間に端然と建っている。「美しいお寺だ。華やかさがもつ濁りがな。今でもこんなお寺があるなんて…」という感慨が第一の正直な思いだった。道元禅師は永平寺とそこに集う人々をこよなく慈しんだ。それと共に「清規」という規則を重じた。「威儀即仏法・作法是宗旨」、つまり修行は日常生活の立ち居振舞い、全ての中にあり、読経、坐禅、食事なども全てが教えの根本であるという。永平寺での修行が殊の外、厳しいと言われる所似である。修行僧は沢山の同志と共同生活しつつ修行・実践していく中で、そのどれもが真理を実行することであるという深い意味を覚知しようとする。その教えが弟子達によって正しく受け継がれることにより、道元禅師の気韻、魂は生き続ける。道元禅師は哲学的で精緻な論理と詩情がみごとに一致している世界的にも希有な思想家、哲学者、そして詩人でもある。

永平寺の参籠で印象深かったのは法堂での朝課であった。外はまだ暗く冷気がひたひたと身に凍みる。二百人ほどの修行僧の勤行は荘厳かつ流麗、所

作進退は一糸乱れず、みごとに美し。僧達の祈りの中でしじらと空は東雲色に明けて行く。私自身、心の垢を流すように心の涙を流し、心の扉を開き、確かに宝をいただいた。

永平寺には特別なパフォーマンス的なものは何もない。只管打坐し、祈り、作務をする、その日常の繰り返しを一日も休まずに七六〇年あまりの間、黙々と実行している。日々の重ねに厳しくも美しい自然が呼応する。

永平寺、この時代にあの福井県の山奥に修行僧がいること、その高潔な気韻を日本人として誇りに思いたい。

世の中には沢山の宗教があるが、それは我執や小欲によって求めるものではない。どんな宗教でも長い間受け継がれているということは、我欲を越えてその気韻が人々の拠り所として存在するからだろう。その役割はこれから一層大切になる。

末筆にNHKで放映された宮崎奕保禅師の言葉を記したい。「真理を黙って実行するというのが大自然だ。誰に褒められたくも思わんし、これだけのことをしたら、これだけの報酬がもらえるということもない。時が来たならば、ちゃんと花が咲き、褒められても褒められなくてもすべきことをして黙って去って行く。そういうのが実行であり、教えであり、真理だ」

(佐藤 睦子)

愛海詩の会 会員募集のお知らせ

お問い合わせは事務局
電話・FAX(011)613-1112

- 工芸・愛海詩の会は手仕事による物作り達の作品を出来るだけ多くの人々の視点にうったえ手でふれてもらい、物を使う人と作る人との交流の場となることを目的に発足いたしました。
- ギャラリーでは、一階の常設展示場、二階の個展会場を設け会員の作品を常に発表出来るよう整えております。
- 愛海詩の会の構成**
- 一、会員は一般会員、特別会員、賛助会員の三部門で構成する。
 - (イ) 一般会員は、工芸品に興味を持ち、会の目的に賛同下さる方。
 - (ロ) 特別会員は自ら工芸品を製作し、その作品の発表、または販売を目的とする方で、会がその技と人格を認めた方。
 - (ハ) 賛助会員は、手仕事の大切さを認識し、その技の向上に期待し、会の目的に賛同下さる方、個人、企業、団体を問わない。
 - 二、入会の条件と特典
 - (イ) 一般会員は年会費三千元とし、ギャラリー、常設展示品、いずれも価格すべてを一割引きとし、会の発行する会報を送付する。
 - (ロ) 特別会員は年会費三万円とし、ギャラリー(約八坪)で年一回十三日間の個展を開く事が出来る。会報の送付をする。
 - (ハ) 賛助会員は賛助金一口一万円以上で、特典は一般会員と同様である。
- その上、工芸についての考え方、主張、提案などを紹介する。

お知らせ

龍村光峯 講演会「錦々光を織る」

平成二十二年十月十九日(火)

午後一時三十分～三時

於、札幌教育文化会館四階講堂

右記お問い合わせ、チケット購入

については工芸ギャラリー・愛海詩ま

でお尋ね下さい。

TEL・011「六三三」一一二二

京都の織物美術家龍村光峯の錦の

美、日本の美の世界をお話し下さい

ます。